

ナラティブ研究の可能性を探るための一考察 <Who-are-you?>への応えとしての<わたし>の物語り

保坂裕子

人間環境部門

A note for the new challenge on narrative inquiry: Identity claim as responding for <Who-are-you?> in narrative practice

yuko HOSAKA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: Narrative inquiry has been getting more and more interests in the field of qualitative research. There are varieties of research which are under the name of narrative inquiry these days. Although researchers are interested in working on/ with narratives, it is still difficult to define narratives or discuss how we can make use of it. In some paper, they identify their research as narrative inquiry by the fact that they use stories as data; it can be written form or interview data (spoken stories form). So it may be a little help to sort out the feature of narrative inquiry and how we can work on it based on our research interest. Narrative inquiry is conceptually sort into three frameworks based on their goals. Each of them defined narrative texts as (i) linguistic structure, (ii) cognitive structure, and (iii) something beyond the text. Discuss the feature of each category and then I especially focus on the dialogic process of narrative practice; works on narrative as beyond the text. I claim that we can work on identity which is interactively constructed in the process of narrative project by focusing on the narrative in this way; and this could be a new challenge for narrative inquiry.

Keywords: narrative inquiry, practice, identity claim, context, interaction

1. はじめに

ナラティブ研究(narrative inquiry)は、心理学、教育学、社会学、医療・看護学などさまざまな人文・社会諸科学の研究領域における質的研究法としてますます注目を集

めている。口述されたもの(語られたもの)、書かれたもの、ヴィジュアル表現されたものと、形式を問わずナラティブへの関心は高まっており、1920年代から1930年代のシカゴ学派によるライフ・ストーリー研究以来、近年では「ナラティブ・ターン(物語的転回)」といわれ、大きなうねりを創っている(Denzin & Lincoln, 2000/

2006; Polkinghorne, 1995; Riessman, 2008; やまだ, 2006)。なかでも心理学においては、行動主義心理学から認知主義心理学への転換に続く、第二の認知革命としてブルーナー(1986, 1990, 2002)が物語りに関する意味生成のプロセスに着目した研究を展開していることの影響が大きいだろう。また日本においても、やまだ(1986)による現場心理学の方法論が期を一にして新たな流れを生みだした。

確かに、質的研究法におけるナラティブ研究が大きな注目を集めるなかで、国立情報学研究所による論文検索システム、サイニー(CiNii)で「ナラティブ」をキーワードとして検索すると、何百件もの研究成果がヒットする。しかし、なかには質的なデータとして語り(発話)のデータを用いていることのみをもってナラティブ研究とするものも少なくなく、ナラティブが持つ研究法としての特性を活かしきれていないと言えない。

そこで本稿では、ナラティブ研究の可能性を探る試みとして、まずは、ナラティブがどのように位置づけられているのかを整理するとともに、その研究がどのようになされているかを概観し、そのうえで、さらなる展開の可能性について検討してみたい。

2. ナラティブとはなにか?

日本の質的研究においてもよく用いられるようになったナラティブ(narrative)であるが、そのままカタカナでナラティブと表記されるか、話し手によって語られたもの=<物語(story)>と、語るという行為そのものを含意して、日本語では「物語り」と表記されることが多い。『質的研究法キーワード』のなかでナラティブは、「継続的な物語あるいは人々の経験の説明である」(Bloor & Wood, 2006/2009)と定義されている。また、ポーキングホーン(Polkinghorne, 1995)はナラティブを、「ストーリーの形式で表された、組織化のスキーマ」であり、ストーリーの生成プロセス、認知的スキーマ、その成果、すべてを含意しているとする。『ナラティブ心理学(narrative psychology)』を著したサービン(Sarbin, 1986)は、われわれの存在そのものがナラティブとともにあるとした。

質的研究において用いられるナラティブは、単に何が起こったかを述べるにとどまらず、「語り手の感情、態度、信念、解釈を表すもの」(Holstein, & Gubrium, 2012)であり、出来事や経験を意味づけ、筋立てる行為(やまだ, 2000)として、そこで見出される<意味>に着目することになる。

わたしたちは、自らの行為、他者の行為に<意味>を

見出すことで理解しようとする。意味づけのプロセスは、個々それぞれ異なっており、そのことが、<わたし>を特異なものとする(ナラティブは自己研究、自我研究、アイデンティティ研究などさまざまな領域において用いられるため、ここでは、それらの用語を敢えて区別せず、含意したうえで<わたし>とする)。出来事や経験を語る視点そのものに<わたし>をみるというわけである。ある人のナラティブは、何らかの意図を持って、誰かに対して語られる。同じ人の同じ経験についてのナラティブが常に同じであるというわけではない。よってナラティブは、語り手があらかじめ持っていたり、どこかにすでにあるものというわけではなく、ある一定の関心が向けられることによって、なるものである、とも考えられる(能智, 2006)。

3. 多様なナラティブ研究の展開

ナラティブが生成されるには、まず語り手がある出来事や経験を選択し、その出来事について語るに値すると判断してから、それらについて言及する、ということが必要となる。そして、その語りそのものがどういうことを意味するのかに関する評価を与える(Labov & Waletzky, 1967)。その評価をもって、語り手がそのナラティブで何を言いたかったのか、が示されるというわけである(Labov, 1997)。この評価によって、語り手の感情や出来事についての意味が明らかになるというわけである。ナラティブの構造分析において言及されることが多いラボフとワレツキーの研究(1967)は、社会言語学を背景としており、そこで目指されていたのは、語り手の社会的特徴(社会階級、ジェンダー、エスニシティなど)とナラティブ構造の特徴との関連を探究することであった。

ナラティブの構造そのものに着目することによって、その背景にある社会・文化的背景を照らし出すことができるのみならず、ナラティブは、個人の意味づけ方やそのプロセスを表すことから、研究対象者および研究者自身をも含めた当事者の視点を探るのに役立つ(森岡, 2013)。よく知られているのは、『病いの語り』(Kleinman, 1988/1996)に著された研究であろう。患者の視点からの病気に目を向けたクラインマンは、これまで医療従事者(医者)によって用いられてきた生物医学の視点からの「疾患(disease)の語り」とは異なる、患者自身の主観的な経験の意味づけに基づく「病い(illness)の語り」を理解することの必要性を指摘した。つまり、これまで聞かれることのなかった声を聞くこと、異なった視点からのナ

ラティブに着目することの重要性が示されたのである。同記事象であっても、立場によってとらえ方、意味づけ方が違う、ということを示すことができるのも、ナラティブ研究の特徴のひとつであろう。

またブルーナー(2010)は、対話者の主観に劇学的にアプローチを試みたケネス・バークによる『動機の文法』(1982)のペンタッド(行為主体(the agent)、行為(an act)、目的(a goal)、受け手(a recipient)、場面(a scene))に関する論考を参照し、それらのどこかがバランスを欠いたときに、つまりそれら要素間の衝突や不調和が見出されたときに、ナラティブがうまれるとする。そしてそのペンタッドはそれぞれの文化によって形成されているのであり、文化はそれぞれに独自の典型的なナラティブを持つ。その典型的なナラティブが、とくに他者が何を思っているかを予想するのに役立つのである。その予想をもとに、新たなナラティブ、他者理解、自己理解の可能性を追究するというわけである。

自らの人生全体を本人のナラティブによって理解することもできるだろう。アトキンソン(1998, 2006)は、ライフストーリーを語ることによって、「自分とはなにか」という個人的アイデンティティの意識が明らかになり、自己のイメージや自己評価もますます明確になると述べている。ストーリーは、人生の全体性を示してくれる道具であり、語ることによって人生により大きな意味づけができ、全体の流れから逸脱してしまっていたものをも統合する。したがって、あえて語らなければ見過ごしてしまっていたことに気づかせてくれるという点において、自己発見のための道具でもあるという。個人のナラティブの一貫性に着目したカー(1991)もまた、人生についての語りと、語り直しに注目した。

小林ら(2008)は、子どもたちが絵本などを通して出会った物語を享受し、またそこから新たな物語を創り出す様子を描いている。自分自身による人生のナラティブのみではなく、絵本などの文化媒体を介して出会うナラティブもまた、自己の物語を描きだし、また描き直す際のツールとなる。わたしたちは、さまざまな物語との出会いのなかで、自らの物語を構築し、また再構築もしているのである。このことは、私たちがなにを適切な物語りとして自らのなかに取り込むかということで、その場での適切さを身につけていっているとも考えられよう。自らがそれまでに我がものとしてきた文化に加え、新しい文化=新しい物語との出会いはつまり、新しい価値観との出会いでもあり、さらにそれをどのように自らのものとしていくのかというプロセスがここで着目されるナラティブの機能であり、また意味づけと意味づけ直しへ

の着目である。つまり、ナラティブについて、その内容を詳細に分析するのではなく、ナラティブを通して自らや他者の意味づけ方を知り、さらにそれらを新たなナラティブの可能性へと投企していく展開を志向することもできる。そこで見出されるのは、個人の人生や物事に対する意味づけ、価値づけというよりはむしろ、ナラティブをツールとして伝えられ、また再構築される、当該の文化・社会のなかでの文化的前提として想定されている「当たり前」とはなにか、ということである。

ナラティブへの近年の関心はこのようにナラティブの内容を検討することに焦点化されたものや、どのようなストーリーを取り入れることによって、自らのナラティブを当該文化のなかで生成していくのかなどであり、それは、どれが正しい説明であり得るのか、真実はどれか、といった真実の語りを探究するためのものではなく、新しい語り、別の語り語られる可能性を追求するものである。つまり、ナラティブ研究によって、隠れた物語を「発見」することではなく、新しい物語を「生成」することへと視野が広げられる(野口, 2009)。

こういった語り手の主体性に着目した研究が進められるなか、語り手が語る場そのものへの注目が当然とされるようになってきたのもまた、近年の傾向といえよう。誰に語るのか、いつ語るのか、どこで語るのか、といったナラティブが生み出される場そのものへの関心が高まっていること、また語りは個人がひとりで創り出すものというよりもむしろ、聞き手との相互作用のなかで紡ぎだされるものである、という認識が広まったことにもよる。ナラティブが生成される場としてのインタビューにおいても、問いそのものの意味は、発せられ、受け取られ、応えられたときに定められる(Mishler, 1986)とされる。どのような問いも、コンテクストなしにはその意味をなさない。意味は、インタビューにおいてインタビュアーとインタビュイーが出会い、両者が積極的に関わり、コミュニケーションしていくことによってうみだされるのであり、両者はともに、「協同で知識を構築していく者」(Holstein & Gubrium, 1995/ 2004)なのである。

人文・社会科学へのナラティブ研究の導入では、人々がその生活、人生のなかで絶え間なく行っている意味生成のプロセスへの探究を可能にしたことが、もっとも大きな貢献と言えよう。しかし、ナラティブを意味づけの中心に据えることで、分析のプロセスが多重化し、ナラティブの内容、生成される文脈、また時間の流れなど、着目点が多様化してきており、ナラティブ研究に多様性・多重性への配慮が求められるようにもなった。そのような多様性を分析する試みとして、「対話的モデル生成

法」(やまだ 2007, 2008)も提唱されている。

4. ナラティブ研究における三つの着眼点

人文・社会科学における人々によって紡ぎだされたナラティブに関する研究は、その特徴のどこに、どのように着目するかによって、その成果も異なってくる。なにをみようとし、どの側面に着目するかを改めて整理しておく必要があるだろう。能智(2013)は、ナラティブ・テキストの分析を内容的側面、構成的側面、生成的側面に整理したうえで、それぞれの特徴について論じている。またホルスタインとグブリアム(2012)は、ストーリーの内容についての研究、ナラティブが生成されるプロセスについての研究、そして社会環境との関わりの中なかで、ストーリーを生み出す行為がどのように調整されていくのかについての研究に分類している。リースマン(2008)もまた同様に、「主題に関するアプローチ(thematic)」、「構造に関するアプローチ(structural)」そして「対話的遂行に関するアプローチ(dialogic-performative)」の三つのアプローチを提唱している。

ここではバンバーグ(2012a, 2012b)に沿って、上述の視点も視野に入れながら、ナラティブ研究の視点を三つに整理しておく。実際のナラティブ研究においては、これら三つを明確に区別することは難しく、互いに関わり合っているが、分析の視点を明確にしておくためにも、それぞれの特徴を整理しておくことは、有意義なことであろう。

わたしたちはストーリーを語る時、出来事や経験に対して、ナラティブの形式を与える。語り手が自らの個人的な経験や出来事にどのような主観的意味を持たせているのかを探るナラティブ研究は、「ナラティブについて(=on narrative)」の探究であり、語られたストーリーの中なかで、登場人物、時間、場所がどのように位置づけられるかといった語り手の位置づけ方に焦点が合わせられる。また、語っている「いま—ここ」の文脈において、そのナラティブでなにを成し遂げようとしているのか、あるいは為し得るのかについての探究は「ナラティブで(=with narrative)」の探究とされる。さらにそれらに加え、ナラティブ研究の可能性を「ナラティブを介して(=through narrative)」の探究として分類している。つまり、(i)ナラティブ・テキストが表していることば、文章、主題一貫性への着目する、言語構造として研究する、(ii)ナラティブ・テキストのプロット、テーマ、一貫性に着目する、認知構造として研究する、そして(iii)テキストそのものについての分析するのではなく、なぜ「いま—こ

こ」でこの話をするのか?を問いナラティブが生み出されている背景や文脈を研究しようとする、以上三つの着眼点を位置づけることができる。次に、これら三つの着眼点について、概観しておく。

(i)言語的構造としてのナラティブ・テキスト

ナラティブを言語構造とみる立場では、ナラティブは最少で 2 つのナラティブ節(出来事)によって成り立っているとされる。そのナラティブ節はともに、続く出来事を帰結させるものとして位置づけられており、単に時間的につながった出来事であるのみならず、原因と結果という一貫性を持つことで結びついているとみなされる。

このアプローチでは、変化し続ける時間の流れを止め、出来事と出来事の想起順序として、あるユニットへとまとめることによって、ナラティブが現れるとされる。これは、「そして」「だから」などの接続詞が用いられることによって、あるいは特定の結語によって両者が結び付けられることによってなされる。ナラティブの中なかでさまざまな言語装置を用いることによって、時間、場所、登場人物の一貫性などを位置づけ、互いを関係づける。

したがって、話し手がどのようにそれぞれを位置づけるか、何についてのナラティブか、が分析の対象となる。つまりストーリーは、語り手がそのストーリーを構成するためにどのような辞書的な統語論の装置を用いるにかかっているされる。そのような言語装置に加え、ストーリーとしての一貫性が保たれることによって、意味論としての組織化がどのようになされているのかを探究することにもなる。

(ii)認知構造としてのナラティブ・テキスト

ナラティブに認知構造を見出そうとする立場では、言語的に構成されたナラティブはもはや、言語構造以上のものであると考える。つまり、そこで立ち現われてくるユニットは、全体の構造を反映した結果としてのボトムアップによって成り立つのと同様、トップダウンでの構造の組織化が行われているというのである。このトップダウンのプロセスは、概念ユニットとして探究されており、物語理解への認知的アプローチや語り直しの研究にみられるものである。これらの出来事についてのユニットは、言語的な特性を持つというよりも、概念的なものであるとみなされる。

そのユニットはたいてい、起(orientation)- 承(complication)- 転(resolution)- 結(closure)を含む。語り手

は、起（方向づけ）において聞き手がある出来事が起こったその時と場所へと引き込む。そして結（終結）として語り終えたところで、いまここへと引き戻すというわけである。

こういったナラティブの一般的なテーマは、多くのナラティブを読み込むことによって見出される。そのプロセスに於いてナラティブの内容は、より大きな全体へと関連付けられるために、それぞれの要素へと分けられて分析されることになる。

言語的一貫性にしても認知的一貫性にしても、両者ともにモノロジックな（独白形式の）テキストに焦点化している。ストーリーの言語的・概念的構造は、プロットや内容に準じるよう作用する。語り手の関心は内容とその組織化にのみあり、その内容を適切に言語化するために、既存の言語的・認知的慣習に従うことになる。したがって研究関心は、自然とそのための手法へと向かうことになる。つまり、ある社会・文化的背景のもとにおかれた人にとって、何が「あたりまえ」とされているのかをナラティブで探るということになる。

(iii) テキストを通して

この立場では、テキストそのものというよりも、そのナラティブをもって、なにがなされている（なされた）のか、に関心が向けられることとなる。上述の二つの視点から探究されることが、今まさにこの場において実践されていること（ナラティブ・プラクティス； narrative practice）として焦点化される。前者二つがともに、モノログとしてのナラティブの側面に着目していたのに対し、ここでは対話のなかに位置づけられたナラティブに基づいて、相互的で遂行的なアプローチがとられる。

この第三のアプローチにおいて言語的構造や認知的構造は、語り手がナラティブを通して為そうとしていることの一側面ではある。しかし語り手がそのストーリーを通して為そうと意図していることは多様であり、たいていの場合それは、ストーリーの構造や内容から推し量ることは不可能である。その理解には、より大きな背景となるコンテキストについての分析が不可欠となる。語り手がそのストーリーを以って為そうとしていることはそもそも、そのような文脈に限定されたローカルなものなのである。この立場からのアプローチで問われることは、「なぜ<いまここ>でこの話をするのか」ということであり、つまりは「このストーリーを以って何が成し遂げられようとし、また成し遂げられているのか」という

ことである。

近年のナラティブ研究は、より相互構成的な側面への注目が高まっているが、どのアプローチが正しく、どれが間違っているということではなく、それぞれが別の研究関心を持ち、探究が進められているということに過ぎない。従来のナラティブ研究では前者二タイプのもものが多く、その蓄積が多いということも事実であり、これからのナラティブ研究を展望する際には、第三の立場に立った研究成果へのニーズが高まっているのも確かであろう。また、ナラティブ研究そのものの研究の深化を受け、ナラティブの分析が、相互に交渉される意味生成のプロセスに焦点化する方法論として長けている、ということがわかってきたという背景もあろう。

そこで本稿では次に、ナラティブを通して、私たちはなにを為そうとしているのか、また何を為し得るのか、という観点から、ナラティブ研究の新たな可能性について検討してみたい。

5. ナラティブ研究とアイデンティティ

質的研究領域におけるナラティブへの関心がますます高まるなか、物語りへと研究関心を向けてきたナラティブ・ターンはいまや、次のステージを迎えている。つまり、ナラティブが相互作用の只中において、いかに意味を与えられていくのか、というナラティブ生成のプロセスそのものに着目する観点の導入である。対話のなかで意味が交渉されていくということは、話し手がナラティブのなかで意味を与えようとし、またその試みが聞き手によって引きとられ、互いにやり取りするなかではじめてその、<意味>を獲得する、ということでもある。新たなナラティブ・ターンは、いかに自己やアイデンティティが相互作用のなかでナラティブを利用して「なされるか(done)」に着目しなければならない。それは、ナラティブの一貫性がどのように保証されるのか、またどのように語り直されていくのか、といったアイデンティティの一貫性に着目するのではなく、その時々において、いかにナラティブを方向づけ、アイデンティティ・クレイムとしているのかを問うことである。

バンバーグ(2012c)は、『NY 式ハッピーセラピー』(2004)というコメディ映画のなかで、主人公デイブが怒り抑制セラピー(anger management)のセラピストに「君の話の聞こう。君は誰かね？(Who are you?)」と問われる場面を紹介し、<わたし>についての語りがいかにその場における文脈や状況と切り離し難いかにについて例示

している。映画のなかでデιβは、自らの趣味や仕事、性格特性について説明しようとするがすべて、「仕事の話は聞いてない。君が誰かをききたい。」と中断されてしまう。困ったデιβは、「模範解答の例をききたいな。君ならなんて答える?」と他のセラピー参加者にたずねるが、「彼は君のことは知らない」とセラピストにはぐらかされて終わる。挙句、「どうこたえるんだ!」と怒りをあらわにしてしまうのである。そしてセラピストは、「君のことはこれでだいたいつかめた。次へ進もう。」とデιβの話を打ち切る。他のセラピー参加者たちは、自らのセラピー参加に至った経緯や、怒りの経験についてのストーリー、またそれをいかに抑制したかなどについて語る。デιβのリストアップした自らの職業や趣味、性格特性についての言及は、この場（怒り抑制セラピーの場）には、そぐわなかったということであろう。自らが何者であるのかを語るには、その場の文脈をとらえることから始める必要があったということである。

わたしたちは、「あなたはだれですか?」という問いをいきなり何の前提もなく向けられるとたいていは、筆者が大学生を対象として行った調査においてもそうであったように、名前や年齢、属性（〇〇大学の 2 年生、〇〇サークルのメンバーなど）家族構成、住所などをまず答えることになる。つまり社会的なラベリングを借用することで、自らのアイデンティティを示そうとする。そしてさらに、好きなもの、得意なもの、苦手なことなどや性格の特徴について、と続く。しかし、いくらそれらを並べ立てたとしても、<わたし>には到達しない。改めて、「あなたはだれですか?」と尋ねられると、なかなか答えづらく、「何が正しい答えなのか?」を探ってしまったりする。<この場合>での正解を、である。しかし、誰かに対して自らのことを話す場面となると、<この場合>がぐっとつかみやすくなるため、聞き手を前にして語ることで、調査対象者であった Y さんが述べているように、「事実よりエピソードのほうが自分らしさを表現できる」(2013.6.25.Y さん)と、実感することができる。自身で連ねた「自分とは誰か」が、「他人が介入すると全く別物になった」(2013.6.25.)と I さんは感想を述べている。

つまりはこれが、ナラティブのなせる業である。そこで何が語られたのかによってナラティブを分析する視点 (i) 言語的構造に着目したの視点、またその場において前提とされている文脈(背景となる社会や文化)を探ろうとする視点 (ii) 認知構造に着目した視点、それらを含みこみ、<いまここ>で何が語られ、それがどのように意味づけられ、価値づけられていくのかという視点 (iii) テキストを通しての視点) に、ナラティブ・プラクティ

スとしてのアイデンティティ・クレイムを見出すことができるということである。

ナラティブの内容に「私は何者であるのか」が語られているとするのではなく、<わたし>を対話者との相互作用のなかに置くことで、その場で交渉されるものとして位置づける。つまり、ここでの問いは、「私は何者であるのか(Who-am-I?)」ではなく、「あなたは何者であるのか(Who-are-you?)」という問いに対して、適切な応えをその場において対話者とともに導き出すこと、といえる (Bamberg, 2011c)。そして何が適切な応えであると前提するのかに、語り手が生きる社会・文化的文脈が現わされることになる。<わたし>についてのナラティブは、実践において、つまりナラティブ・プラクティス (narrative practice) において見出されうるのである。

バンバーグ(2012b, 2012c)は、このように相互作用のなかで操作されるアイデンティティ構築を、以下の三つのジレンマのなかでとらえることを提案している。

(a) <おなじところ>と<ちがうところ>

私たちはナラティブ実践のなかで、自らのアイデンティティを語りだそうとするとき、そのナラティブのなかでの登場人物としての他者と自らのおなじところ、ちがうところ、またナラティブの聴き手である他者とおなじところとちがうところを強調しながら、自らのアイデンティティ・クレイムを行う。自らをナラティブのどこに位置づけるのかを他者との差異化のなかで行うということである。同じであることでコミュニティや文化の共有を主張したり、自分はそれとはちがう、ということをもって、立場の違いを主張したりする。同じであることは、そのコミュニティのメンバーであることを示すものであるし、違うということは、特別でユニークであるということを意味することになる。

(b) 行為主体性

ストーリーのなかの登場人物として、また語り手として主体性をもつものとして位置づけるかどうかということとはつまり、ある出来事（経験）において自らが能動的に働かかけたのか、あるいは受動的にそうってしまったのかを意味づけることである。したがって、その出来事（経験）への責任の所在が問われることになる。 「さっきのおもちゃであそんでたら、なんでかわからんけど、なにもしてないのに、いきなりはずれて、こわれてしまっくん」という子どものナラティブは、巧妙に自らがおもちゃを壊してしまったという行為主体として、つ

まり起こってしまった出来事（おもちゃが壊れたこと）への責任主体としてのポジショニングを避けていることがわかる。わたしが壊した、のではなく、おもちゃが壊れた、のであり、そこに自らの積極的な関わりを介在させないナラティブとなっている。このように、自らと外界との関わりをどのようなものとして位置づけるかによって、< わたし >をある出来事への責任主体とするか否かが表明されることとなる。当然、ナラティブ実践が展開される< いま—ここ >においてさらに、その行為主体性が問われることになる。「勝手に自ら壊れてしまったおもちゃ」に主体性が認められるのか、否、その可能性があるのかが検証されることになる。

(c) 現在と過去との一貫性

自らの過去と現在との連続性、一貫性を示すことで、わたしが変わらずわたしであることを意味することができ、あるいは、非連続性のもとで語ることによって、過去の自らを変化させ、新しい自分になったことを主張することもできる。かつての自分がどのようなようであり、< いま—ここ >にいる自分とつながりを持つのか、あるいはまったく変化したのか。過去と現在をどのように関係付けるかはつまり、自己価値の獲得や発達の問題と深く関わっている。

ここに示した三つのジレンマは、ナラティブ・プラクティスを通してアイデンティティ構築（クレイム）をする際に、ポイントとなるものであり、相互に関わり合っていることは言うまでもない。つまりナラティブ実践におけるアイデンティティ・クレイムに着目する際の分析の焦点となり得るということである。その語りのなかで登場人物を自らとおなじものとして、あるいはちがうものとして位置づけるのか、登場人物を能動的な主体とするのか、あるいは受動的な主体として位置づけるのか、さらには中心となる人物に変化はみられるのか、あるいは見られないのかという三つのジレンマをナラティブ・プラクティスを通して実現しているのである。

語りは、語り手によって結論付けられ、評価されることによって終わらず、常に対話者へと開かれているため、語り手のストーリーは対話者によって肯定されるかもしれないし、否定されてしまうかもしれない。ここで問題になるのは、自分の経験を正直に正しく語ったか否かではなく、それがたとえ他者の行為をめぐる物語りであったとしても、ストーリーのなかのあの時、あの場所での事象を、< いま—ここ >において物語るものが、「あなたは誰なのか」という問いへのひとつの応えとなるという

ことである。そしてその応えは、< いま—ここ >において、受け入れられたり、否定されたり、修正されたりしながら、交渉されていく。このような諸々のプロセスを経て、その物語りにおいて< わたし >という意味（価値）を、対話者とともに創出する実践こそが、ナラティブ・プラクティスであり、ここに語り手のアイデンティティ・クレイムが見出される。

6. おわりに：さらなる発展に向けて

ナラティブ・プラクティスにおいて焦点化されるのは、< わたし >という価値・意味が他者とのあいだで協創されるプロセスそのものである。(i)で焦点化される言語的構造においては、語られたストーリーそのものの内容が問われ、それを媒体（ツール）として語り手は自らのアイデンティティを表すことになる。(ii)で焦点化される< いま—ここ >での聞き手との関係に着目した際には、自らがどのようなコミュニティの文脈におかれ、どのような役割やあたりまえとするルールによって統制されているのかが、アイデンティティの表れとなる。語り手はもちろん、自らの意図を持って選択したストーリーを語る事となる。そのストーリーのなかで誰が行為主体となり、何を、どのような意図を持って行うのか、その背景にあるものはなにか、などをそれぞれ位置づけることによって、語り手は自らの< いま—ここ >におけるポジションを定めようとする(Harré, & van Langenhove, 1999)。それは、ナラティブを個人の内面の開示や告白として分析するのではなく、語り手が聞き手との相互関係のなかで、ある出来事を理解可能であるように意味づける、あるいは意味づけ合うプロセスでもある。またそれは、語り手のみの意志によって達成されるものではない。自らのナラティブをツールとして位置づけようとしたポジションは常に、対話者（聞き手）によって挑戦を受ける。対話者による意味（価値）づけは、語り手の意図したそのままではありえない。対話者が語り手と同じ文化を共有している際には、合意が得られる可能性も高まるだろう。しかし、文化を共有しない場合には、< わたし >が何者であるのかを示すのが困難になる。したがって、ナラティブ・プラクティスにおいてなされているのは、互いに文化を共有しない相手どうしが、< いま—ここ >において、共有し得る< なにか >を創りだそうとしているともいえる。そのプロセスを通して、互いのアイデンティティが描き出され、また他者との相互理解が可能となるのであろう。

ここで再び、映画の例を挙げて本稿での試みを閉じよ

うと思う。『ブレイクファースト・クラブ(The Breakfast Club)』(1986)はジョン・ヒューズ監督による、80年代を代表する青春ドラマのひとつである。映画は、5人の高校生たちが土曜日に補習を受けるために集まってくるところから始まる。映画の冒頭では示されないが、徐々に明らかになっていくそれぞれが起こした「問題行動」によって土曜日の補習に呼び出された生徒たちに教師は課題として、「自分は何者であるのか」についての作文(エッセイ)を書くように指示する。

「秀才(brain)」「スポーツマン(athlete)」「不思議ちゃん(basket case)」「お姫さま(princess)」「不良(criminal)」とそれぞれが個性的に特徴づけられ、ラベリングされた5人は、学校においても異なるグループ(階層)に属し、文化を共有しているとは言い難い。実際、同じ学校に所属していても、互いに言葉を交わすことはなかった。したがって、互いが関わり合う前提が欠けており、何を互いにとっての「あたりまえ」の前提とするかという合意もまったくない5人であった。しかし、はじめは対話が成り立たず、牽制し、探り合っていた5人が、ともに「自分は何者であるのか」についての作文を書くための苦痛な時間を共有するうちに、少しずつ打ち解けてくる。それぞれが今回の補習にくる原因となった出来事(問題行動)についてや、自らの家族、友人関係などについて語りはじめ、そのことを通して、互いを理解しようとしはじめる。

<わたし>をめぐるナラティブはこうして、文脈を共有しない他者との出会いのなかで、互いをポジショニングし、そこで与えられたラベリングに抗い、あるいは妥協し、修正しながら、互いの存在を交渉し続けていくことなのかもしれない。他者との出会いのなかで、つまり他者との対話によって新たに生み出されるナラティブを介してわたしたちは、自らが何者であるのかを他者に対して、また自分自身に対しても意味づけなおしているであろう。

この映画に出てくる教師(Mr. Vernon)は、彼らと向き合うこともせず、自らの与えたラベリングを固辞することによって生徒たちとの対話が断たれている。生徒たちは互いの対話のなかでポジションを変化させ、それぞれが<わたし>とは何者なのか、というアイデンティティ・クレームが変化させていった様子がよく描きだされていた。これまで話すこともなかった他者との出会い、そして対話のなかで、「問題行動」へと自らを向かわせていた背景に気づき、別なる自分でもありうる、そうなりうる可能性を見出したことにより、彼らそれぞれにとっての<わたし>のナラティブは変化した。彼らは、互いのナ

ラティブを通して、それぞれのなかにその他者を見出したのである。

課題となった作文を、「秀才」が次のようにまとめて映画は終わる。

Dear Mr. Vernon,

we accept the fact that we had to sacrifice a whole Saturday in detention for whatever it is we did wrong, but we think you're crazy for making us write an essay telling you who we think we are.

You see us as you want to see us, in the simplest terms, in the most convenient definitions. But what we found out, is that each one of us is a brain, and an athlete, and a basket case, a princess, and a criminal.

Does that answer your question?

Sincerely yours,

The Breakfast Club.

<わたし>をめぐる物語りへのアプローチは、他者との出会いのなかで自らのアイデンティティ・クレームをぶつけ合い、協創し続けることであり、ナラティブ研究は、この三つのレベルでなされている実践としてアイデンティティをとらえることを可能にする。ナラティブ・プラクティスは、いかに語り手と聞き手が相互に話の中でストーリーを両者にとって意味あるものとしてともに作りあげていくのかというプロセスに関心をもつ(Gubrium & Holstein, 2009; Riessman, 2008)のであり、なにがそこから新たなものとして創りだされるのかが問われるのである。

ナラティブが日常のなかで実践される際に、いかにして<わたし>が交渉されるのか。そのようなアイデンティティ・プラクティスに着目したナラティブ研究の可能性は、開かれたばかりである。

引用・参考文献

- Atkinson, R. (1998) *The life story interview*. London: Sage.
- Atkinson, R. (1995) *The gift of stories*. Westport CT: Greenwood Publishing Group, Inc. (2006, 塚田守 (訳) 『私たちの中にある物語』 ミネルヴァ書房.)
- Bamberg, M. (2011). Who am I?: Narration and its contribution to self and identity. *Theory & Psychology*, 21(1), 3-24.
- Bamberg, M. (2012a). Narrative analysis. In H. Cooper (Editor-in-chief), *APA handbook of research methods in psychology* (3 volumes) (pp. 77-94). Washington, DC: APA Press.
- Bamberg, M. (2012b) Why narrative? . *Narrative Inquiry*, 22(1), 202-210.
- Bamberg, M. (2012c) Narrative practice ad identity navigation. In J. A. Holstein, & J.F. Gubrium, (Eds.) *Varieties of narrative analysis*. Los Angeles, CA: Sage.
- Bamberg, M., De Fina, A., & Schiffrin, D. (2011) Discourse and identity construction. In S. Schwartz, K. Luyckx & V. Vignoles (Eds.), *Handbook of identity theory and research* (pp. 177-199). Berlin/New York: Springer Verlag.
- Bloor, M. & Wood, F. (2006) *Keywords in qualitative methods*. London: Sage. (2009, 上淵寿 (監訳) 『質的研究法キーワード』 金子書房.)
- Bruner, J. (1986) *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. (1990) *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Bruner, J. (2002) *Making stories*. NY: Farrar, Straus and Giroux.
- Bruner, J. (2010) Narrative, culture, and mind. In D. Schiffrin, A.D. Fina, & A. Nylund, (Eds.) *Telling Stories*. Washinton, DC: Georgetown University Press.
- Burke, K. (1969) *A grammar of motives*. Berkeley: University of California Press. (1982, 森常治 (訳) 『動機の文法』 晶文社.)
- Carr, D. (1991) *Time, narrative, and history*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Denzin, N. & Lincoln, Y. Eds. (2000) *Handbook of qualitative research*. London: Sage. (2006, 平山満義 (監訳) 『質的研究ハンドブック』 北大路書房.)
- Gubrium, J. & Holstein, J.A. (2009) *Analyzing narrative reality*. LA: Sage.
- Holstein, J.A. & Gubrium, J.F. (1995) *The active interview*. London: Sage. (2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行 (訳) 『アクティブ・インタビュー』 せりか書房.)
- Holstein, J.A., & Gubrium, J.F. (Eds.) (2012) *Varieties of narrative analysis*. Los Angeles, CA: Sage.
- Kleinman, A. (1988) *The illness narratives*. NY: Basic Books. (1996, 江口重幸・五木田紳・上野豪志 (訳) 『病いの語り』 誠信書房.)
- 小林紀子 (編) (2008) 『私と私たちの物語を生きる子ども』 フレーベル館.
- Labov, W. (1997) Some future steps in narrative analysis. *The Journal of Narrative and Life History*, 7, 395-415.
- Labov, W. & Waletzky, J. (1967) Narrative analysis: Oral versions of personal experience. In J. Helm (Ed.) *Essays on the verbal and visual arts*. Seattle, WA: University of Washington Press.
- Mishler, E. G. (1986) . *Research interviewing: Context and narrative*. Cambridge, MA: Harvard University Press .
- 森岡正芳 (2013) 「ナラティブとは」 やまだ・麻生・サトウ・能智・秋田・矢守 (編) 『質的心理学ハンドブック』 新曜社.
- 能智正博 (2006) 「“語り” と “ナラティブ” のあいだ」 能智正博 (編) 『〈語り〉と出会う: 質的研究の新たな展開に向けて』 ミネルヴァ書房.
- 能智正博 (2013) 「ナラティブ・テキストの分析」 やまだ・麻生・サトウ・能智・秋田・矢守 (編) 『質的心理学ハンドブック』 新曜社.
- Polkinghorne, D. E. (1988) . *Narrative knowing and the human sciences*. Albany: State University of New York Press .
- Polkinghorne, D.E. (1995) Narrative configuration in qualitative analysis. In J.A. Hatch & R. Wisniewski (Eds.), *Life history and narrative* (pp.5-23). London: Falmer.
- Riessman, C.K. (2008) *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Sarbin, T. (1986) *Narrative psychology: The storied*

Nature of Human Conduct. CT: Praeger Pub.

Shwandt, T.A. (2007) The sage dictionary of qualitative inquiry. London: Sage. (2009, 伊藤勇・徳川直人・内田健(監訳)『質的研究用語辞典』北大路書房)

やまだようこ(1986)「モデル構成を目指す現場心理学の方法論」愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51. (やまだようこ(編)(1997)『現場心理学の発想』新曜社)

やまだようこ(2000)「人生を物語ることの意味：ライフストーリーの心理学」やまだようこ(編)『人生を物語る：生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房.

やまだようこ(2006)「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念：ナラティブ・ターンと物語的自己」『心理学評論』49, 436-463.

やまだようこ(2007)「質的研究における対話的モデル構成法：多重の現実、ナラティブ・テキスト、対話的省察性」『質的心理学研究』6, 174-194.

やまだようこ(2008)「多重テキスト間の生成的対話とネットワークモデル：『対話的モデル生成法』の理論的基礎」『質的心理学研究』7,21-42.

(平成25年9月30日受付)